

June 28, 2015

神の言葉で生きる

マタイ 4:1-4

4:1 さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。

4:2 そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。

4:3 すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」

4:4 イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」

あるジャムの会社が、ジャムのパッケージに「人はパンだけで生きるものではない」と書きました。「パンだけでなく、わが社のジャムもつけてお召し上がりください」というわけです。「人はパンだけで生きるものではない」という言葉は多くの人に知られているので、宣伝効果は抜群だったそうです。

「人はパンだけで生きるものではない」という言葉は、もちろん、「ジャムも必要」と言う意味ではありません。イエスは、この言葉に続いて「神の口から出る一つ一つのことばによる」と言っておられます。人を生かすのは「神の言葉」だと言われたのです。多くの方は、日曜日に教会に行ってお説教を聞けばためにはなるだろうが、そうしなかったからといって生活にさしさわりがあるわけではない、まして、命にかかわることではないと思っています。そんなふうに神の言葉を、軽く考えてしまうのです。それで、主イエスは「神の言葉が人を生かしている」こと、「人は神の言葉で生きるもの」であることを教えようと言われたのです。「神の言葉が人を生かす」とはどういうこ

となのか、「神の言葉によって生きる」とはどういうことなのかをご一緒に学びましょう。

一、神の言葉と創造

まず最初に、わたしたちが「神の言葉によって生かされている」ということを考えてみましょう。じつは、人だけではなく、世界のあらゆるものは神の言葉によって生かされているのです。神の言葉は、世界を創造し、それを支え、それを生かしています。創世記を読むとそのことが分かります。神が「光よあれ」と言われると、光ができました。「大空よあれ」と命じられると大空ができました。「かわいた所が現われよ」と言われると、陸地が現れました。また、神が太陽、月、星に「光る物は天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ」と命じられると、そのようになりました。

こうして、神は世界を形づくられたあと、そこを命のあるもので満たされました。神が「地は植物…を地の上に芽生えさせよ」と命じられると、陸地に草花、樹木など、あらゆる植物が生じました。「水は生き物の群れが、群がるようになれ。また鳥は地の上、天の大空を飛べ」と命じられると、海や川、湖に魚が泳ぎまわり、空には鳥が飛ぶようになりました。さらに、神は「地は、…生き物、家畜や、はうもの、…野の獣を生ぜよ」と命じ、あらゆる動物を造られました。世界は神の言葉によって造られ、植物も動物も神の言葉によって命を与えられたのです。

あらゆるものを造られた神は、最後に人を造られました。神が人をお造りになるときは、たんに「人よあれ」とはおっしゃらず、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう」とおっしゃいました。神は、人を他の生き物とは違った、特別なものとして、心を込め、愛を注いでお造りになったのです。しかし、神は、その思いを言葉に出して、人を

造られました。人も、神の言葉によって造られたのです。

世界の起源について、古代の人々はさまざまに思い巡らしました。ギリシャの人々はギリシャ神話の神アトラスが天空を支えていると考え、インドの人々はゾウが地面を支えていると考えました。しかし、聖書は世界を支えているのは神の言葉だと教えています。詩篇 33:6 に「主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって」とあります。ヘブル 11:3 には「信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです」と記されています。

「くちで言っただけでは信用できない」という考え方があります。それで「くち約束はあてにならないから、証文を書いてくれ」ということになるのです。しかし、聖書では、たとえそれが文字にならなくても、くちから出た言葉には、重みがあり力があるとされています。言葉はくちから出て、空中に消えていくのではなく、くちから出たとたん形のあるものになり、それは物事に働きかけて結果をもたらすのです。実際、ポリスが「フリーズ」と言えば、人々は両手をあげてじっとします。心ない言葉が矢のように人の心を突き刺すこともあれば、ひとことの温かい言葉が傷ついた人を癒やすこともあります。

人間の言葉ですら、そんな力を持っているとしたら、神の言葉はなおのことです。イザヤ 55:10-11 にこうあります。「雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」雨や雪が降り、地を潤し、地に実りをもたらす、人にパンを与えます。しかし、天に命じて雨を降らせ、地に命じて実

を結ばせているのは、じつは、神の言葉なのです。みなさんはすべてのものが神の言葉によって造られたことを信じますか。人間には、言葉だけで物を造り、命を生み出す力はありませんが、神にはその力があります。人間の場合は、意志したことを体を使って行わなければ、何も作り出せませんが、神の場合は、そのご意志は言葉によって実行されるのです。

人は、大地の実りを収穫し、それを脱穀し、臼で粉をひき、その粉を焼いてパンを作るのですが、それらすべての背後に神の言葉があるのです。神の言葉によって、はじめてわたしたちはパンをくちにすることができるのです。主イエスが「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」と言われたのは、じつに真実です。それは神の言葉がすべてを造り、すべてを生かし、すべてを支えているからです。わたしたちの一日三度の食事も、じつは神の言葉によって備えられているのです。わたしたちは神の言葉によって生かされているのです。

二、神の言葉と再創造

次に、「神のことばによって生きる」ということを考えてみましょう。「生きる」といっても、さまざまなレベルがあります。まず「たくましく生きる」というレベルがあります。庭にやってくるリスを見ているとそう思います。わたしたちが暑くてたまらないときも、リスは木にのぼったり、フェンスの上を元気に走り回っています。凍るような寒い日も、餌を集めています。どんな環境の中でもじつに、たくましく生き抜いています。それに比べれば、人間はひ弱です。冷房や暖房なしには暑さにも寒さにも耐えられません。精神的にも、いつも心配したり、思い患ったり、失望、落胆してしまいます。わたしたちは動物たちから「たくましく生きる」ことを学ばなければならないかもしれません。

つぎに、「上手に生きる」というレベルがあります。少し知恵のある動物はこれができます。チンパンジーに棒を与えると、それでバナナをたたき落として食べたりします。人間はもっと知恵があり、この分野では他の動物には負けてはいません。しかし、あまりにも自分の知恵に頼ってしまい、そのために、結局は愚かな生き方をしてしまうことが多いのです。科学技術が発達しました。毎日のように新しい製品が作られ、わたしたちの生活はそうしたもの無しには成り立たなくなってきました。しかし、そうした技術の進歩がほんとうに人をしあわせにしているかという、そうしたものがかえって人の心を蝕んでいるという現実があります。人間はその知恵によって核兵器を作り出しました。そして、自分たちが作ったもので、自分たちが滅びてしまうのではないかという恐怖の中に生きているのです。これは、まさに人間の愚かさの典型だと思います。

神は人間に「たくましく生きる」、「うまく生きる」というだけでなく、「より良く生きる」というレベルの人生をお与えになりました。それは、パンを食べて体を生かすといった以上のもので、人として価値ある生き方をすること、神から与えられた目的や使命を発見してそれに向かって生きていくということなのですが、人々はそうしたことに心を向けることなく生きるようになりました。人は、罪を犯したとき、神を愛し、人を愛して生きるというレベルの命、霊的な命を失いました。そのため、神に背を向け、人を押しのけて生きるようになったのです。だからといってそういう人がいつも病気であるとか、精神状態が安定しないというわけではありません。神に従う人健康で、何があっても動ぜず、自分の思いを貫き通していく強さを持っているかもしれません。また、才能に恵まれ、人付き合いにもそつがなく、社会的に成功している、そんな人も多いのです。「より良く生きる」というレベルが欠けていても、「たくましく生きる」、「うまく生きる」ことができなく

なるわけではないからです。しかし、神と共に生きることのない人生は、結局は、人生の目的も、意味もない人生です。お金はあっても豊かな心を持つことができません。快樂はあっても本物の喜びはありません。気休めはあっても動かない平安はないのです。神の目から見れば、からだは生きていても霊は死んでいるのです。

神は、そんなわたしたちを、新しく造りかえ、霊の命を与えて生まれ変わらせてくださいました。それは、もちろん、イエス・キリストにより、聖霊によってなのですが、同時に、神の言葉によってでした。第一ペテロ 1:23 に「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることはない、神のことばによるのです」と言っています。神の言葉は、人にパンを与えてからだの命を支えるだけではなく、人に霊の命を与え、人に神を愛し、他を愛して生きる、新しい命を与えるのです。神の言葉は創造の力ばかりでなく、再創造の力をも持っています。人が神に造られたものとして、ほんらいの人間として生きるには、神の言葉が必要なのです。人は神の言葉によって、はじめて、ほんとうの意味で「生きる」ことができるのです。

三、神の言葉と成長

神の言葉によって生まれた者は、神の言葉によって成長します。第一ペテロ 2:2 に「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです」と書かれています。神の言葉によって生まれた者は、神の言葉を食べ、飲んで成長します。ここには、赤ちゃんがミルクを求めて、泣き叫ぶように、わたしたちも神の言葉を熱心に求めなさいと、教えられているのです。

しかし、現代は、神の言葉を求めることに熱心でなくなりました。教会もまた、人々に神の言葉を分け与えることに専念し

なくなりました。ロサンゼルスには戦前から日本語教会がいくつもありました。その中のひとつの教会を指導しておられた葛原定市先生が、戦前の20年間、毎月休みなく発行してこられた機関紙を読む機会を得ました。そこに教会の集会案内があったのですが、週日の集会といえば、旧約研究会、預言書研究会、福音書研究会など、ほとんど聖書を学ぶものばかりでした。けれども現代の教会では、聖書を学ぶ集まりが少なくなり、カルチャーセンターでやっているような集まりが多くなりました。聖書を学ぶ集会があったとしても、参加者は少なく、他のイベントとスケジュールが重なったときには、聖書の学びのほうがかancelされるとというのが現状のようです。もちろん、時代とともに、人々のニーズも変わってきますから、教会でもさまざまな集会や催しが必要に応じてなされて良いと思います。しかし、わたしたちの霊の命を支えるのは、なんといっても神の言葉です。それは他では与えられないものです。どんなに時代が変わっても、教会では、神の言葉が第一にされるべきだと思います。

アモス 8:11 に「見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、それはパンのききんではない、水にかわくのもでもない、主の言葉を聞くことのききんである」という言葉があります。世界中の指導的な牧師たちは、みな口をそろえて、今の時代は御言葉の飢饉の時代だと言っています。教会で神の言葉が神の言葉として語られていない、聞かれていないということです。その結果、わたしたちは霊的な栄養失調に陥り、霊的な力を失っているということです。

わたしも家内もそうしたことを感じ、アメリカでは自分を生かしてくれるような日本語のメッセージをなかなか聞くことができず、苦しい思いをしていたときです。日本のある先生が、わたしたちのところに寄ってくださることになりました。それで、その先生に礼拝メッセージをお願いしました。そのメッ

セージを聞いて、家内はこんな詩をつくりました。

あゝいいなあ
神を愛し 人を愛し
福音を愛して
聖書を絶対の真理として
握っている人の話は…
心が生きる！

わたしもその先生のメッセージに心が生きました。それは、その先生が、わたしたちにとって親しい方だったからというだけではありません。先生が神のことばを神のことばとして、忠実に語ってくださったからです。神の言葉が私たちの心の中に入って働いたからです。

詩篇に「これこそ悩みの中の私の慰め。まことに、みことばは私を生かします」（詩篇 119:50）とあります。礼拝で神の言葉を聞くたびに「神の言葉によって生かされている」ことを確認しましょう。個人で聖書を読むとき、「神の言葉によって生きる」ことができますようにと、祈り求めましょう。そのようにして、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」との御言葉を体験していきましょう。その体験を持ち寄って、来週また、共に主を礼拝しましょう。

（祈り）

父なる神さま、あなたは、御言葉によってこの世界を造り、わたしたちを生かしてくださいました。あなたのお言葉によって与えられた命は、あなたのお言葉無しには決して成長することはありません。赤ん坊のように、霊の糧である御言葉を求めます。くちを大きく開けます。週ごとの礼拝で、日毎の祈りのときに、わたしたちを御言葉で満たし、生かし、力づけてください。主イエスのお名前です。